



●●●● 少女雑誌の部屋から ●●●●

少女雑誌の部屋では、挿絵画家として活躍した藤井千秋の生誕100年を記念して企画展「藤井千秋展」を開催いたします。(5/18～)展示では、千秋が手掛けた少女雑誌の目次絵、挿絵、口絵のほか、付録や絵本などをご紹介します予定。これまで、千秋だけに焦点をあてて展示することはなかったのですが、準備をしながら、描かれた少女像の凛とした雰囲気と麗しさに何度もため息をつきました。当時の読者だった少女たちが夢になったのもわかる気がいたします。千秋が描く爽やかな少女の絵は、新緑が美しい初夏にぴったりです。ぜひこの機会にご覧くださいませ。

藤井千秋

Fuji Chika

6月4日、岐阜県生まれ。京都市育ち。

京都市立絵画専門学校図案科(現・京都市立芸術大学)卒業後、昭和21(1946)年末『少女の友』に挿絵を描くようになると、またたく間に戦前の中原淳一に代わる人気挿絵画家となった。昭和22(1947)年に中学の教師となるが、挿絵の仕事が認められるようになり、多忙を極めたため2年で退職。

昭和30(1955)年、『少女の友』休刊後は主要な活動の場を『女学生の友』に移し、『小説ジュニア』、『ジュニア文芸』等、ジュニア小説の挿絵でも活躍した。清潔感あふれるみずみずしい少女のイラストは、昭和30年代の少女たちに絶大な人気を誇った。

ジュニア小説雑誌の廃刊が相次いだ1970年代には挿絵の仕事からは遠ざかるが、晩年まで高い女性像を描き続けた。

1923-1985

『少女の友』の看板画家に

『少女の友』に千秋の描く絵が初めて登場したのは昭和21年12月号。当初は小さなカットばかりでしたが、第七代主筆・森田淳二郎との出会いによって才能が見出されると、連載小説の挿絵から巻頭を飾る口絵、付録まで手掛けるようになり、活躍の場が一気に広がりました。その後、専属画家契約を結び、看板画家となったのです。

シルエット画

千秋の世界を象徴する作品のひとつが“シルエット画”です。影絵のようなシルエットに表情は描かれませんが、優れた表現力で顔の向きや髪の毛の流れ、指先などに表情をもたせました。シンプルな表現の中に卓越したデザイン感覚が際立ちます。

寂聴との接点

昭和23、24年頃、千秋は『少女の友』で挿絵画家として人気を博していました。

その頃、住まいのある京都の出版社・大翠書院で童話の表紙絵やカットを描く仕事をしていましたが、同会社に事務員として勤めていたのが後の瀬戸内晴美(寂聴)でした。

当時、恋人と別れて失意のどん底にいた瀬戸内でしたが、昭和25年には『少女世界(富国出版社)』に少女小説を書いてデビューを果たしました。

「藤井千秋の画集がでるときには帯文(推薦文)を書くわよ」と言っていたそうですが、残念ながら実現することはありませんでした。

